

## 15. フェリッペ2世(その1) エル・エスコリアル宮



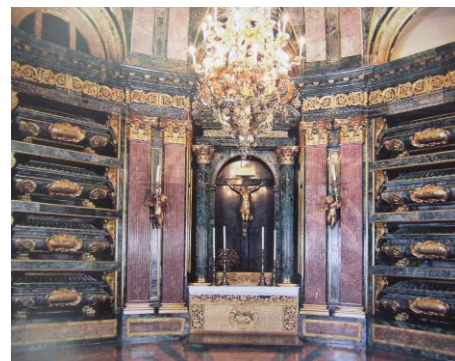
スペイン初日は昨晚の移動の疲れでダウンした家内をホテルに残して、わたしはエル・エスコリアル宮を訪れました。現在は世界遺産であり、正式名称サン・ローレンソ・デ・エル・エスコリアル修道院となっています。この王宮を建造したのがイベリア半島を統一してイスパニアつまりスペインを「日の沈まぬ国」にしたフェリッペ2世です。

巨大な石造建築物はリスボンのジェロニモス修道院に圧倒されていますし、ポルトガル中どこに行っても堅牢な石造りの建物のオンパレードですから、慣れたつもりでした。しかし、このフェリッペ2世の建てた王宮にはやはり圧倒させられました。圧倒されつつもこの建物には何か足りないものがあるような気がしてなりません。ジェロニモス教会は大理石製でした。マヌエル様式という過剰装飾気味の建物ではあっても、大理石特有の人肌のようなぬくもりを感じさせてくれました。このエル・エスコリアル宮は花崗岩製の、装飾性を極力省いた巨大建築物からは、人の温もりをまったく感じる事ができないのです。フェリッペ2世という人がどんな王様だったのか、この建物を見ていると少し背中が寒くなるような恐ろしさとともに分かるような気がします。

もっとも、わたしが既に石造建築物に食傷していることもあるのかもしれませんが、巨大な石造りはエジプトのクフ王のピラミッドやアブシンベル宮殿の洗礼も受けていますが、とにかく緑も少ない乾燥した気候の下で、石造りの史跡や建造物ばかり見ていると、確かに疲れます。高級なフランス料理を食べ続けると（わたしはもちろんそんな経験はありませんが）お茶漬が食べたくなるというような、生理現象に近い感覚でしょうか。どうも、それだけではないとおもいます。

要は毛越寺跡や象潟に「無常」や「もののあはれ」を感じる芭蕉的な心象世界に、首まで浸かって暮らしてきた日本人なら誰でも感じる感傷だと思います。「存在する必然性を失ってからも永久に存在し続けなくてはならないこと」への深い恐れと悲しい惻隠の情とも言いましょうか。

フェリッペ2世の人生を行きつ戻りつすることになりますが、彼はこの王宮(現在は修道院ですが)の地下に眠っています。どうゆうわけかイベリア半島では王の棺の納められている場所をパンテオン(ギリシアやローマの神殿)と呼んでいます。それがいつからそうなったのか、どうしてそう呼ぶのかはわかりませんが、唯一神宗教であるカトリックを国教としている国の王たちの墳墓を、多神教宗教のギリ



シアやローマの神々を祀る神殿になぞらえていることの、背景に何があるのか興味をそそられます。それにしてもパンテオンに眠る王、王妃やその家族たちの棺の数には圧倒させられます。ずっと以前、シナイ半島の聖カトリーナ修道院で、うず高く積み上げられた歴代の修道士たちの頭蓋骨を見た時もそうでしたが、これだけ圧倒的な量で迫られるとかえって死への恐れや忌避感はなくなるものですね。



フェリッペ2世の妹の息子です。

使節団がリスボンからシントラへ移動する際も、わざわざ王家の馬車を差し向けられています。その自分専用の馬車を差し向けたのは、副王の母自身ですから、欧州内の王家同士の交際のような破格の待遇と言わざるを得ません。

彼らへの待遇は使節団がスペインに移動してから、さらにエスカレートしています。跪いて王にキスをしようとした伊東マンショを、王自ら抱え起こして抱擁し、他の3人の少年たちも同じように抱擁しました。居並ぶ貴族たちの方が驚いたそうですから、それが如何に破格の待遇だったか想像できます。エル・エスコリアル宮を建てた感覚から、フェリッペ2世という人を想像するに自分の権威を大きく見せることには熱心でも「無駄なことはしない」人だと思われれます。その人が極東から来た子どもたちを破格の待遇で迎え入れたのですから、その魂胆は何かと、つい疑いたくもなります。

さて、伊東マンショたち天正遣欧少年使節団は1584年11月にマドリッドでフェリッペ2世に公式謁見を許されています。実は1580年にポルトガルはスペインに併合されており、この時期、イベリア半島全土に君臨していた実力者はフェリッペ2世にほかなりません。その強大な権力者に伊藤マンショたちは、まるで久しぶりに会った孫たちに接するような歓待を受けています。

リスボンでもそうでした。極東の小島からやってきた少年たちに、ポルトガル副王（王は併合したスペインのフェルッペ2世）が自ら応接に出ています。副王はリスボンのサンロッセ修道院を宿舎にしてくれただけでなく、シントラの王宮にも招き泊めて歓待しています。このポルトガル副王アルベルト・アウストリア枢機卿は



マドリッドでの宿泊はアトーチャ駅の真ん前のこのホテル。隣りがピカソの「ゲルニカ」のあるソフィア王妃記念美術館で、プラド美術館にも歩いて行けます。